

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：12608

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2017

課題番号：24720230

研究課題名(和文)協働的な学習環境におけるモニタリングと日本語読解学習に関する研究

研究課題名(英文)Japanese reading comprehension and monitoring in a collaborative learning environment

研究代表者

佐藤 礼子(Sato, Reiko)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・准教授

研究者番号：30432298

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文):文章理解におけるモニタリングの働きを促す学習方法として「他者への説明」がある。本研究では、説明構築プロセスを他の学習者と協働で行うことにより、内容理解の深化とモニタリング技能の意識化を目指した。実践では、1) 作文を読みその内容をグループでポスター化する活動と2) ペアで文章をレジュメ形式にまとめる活動を行った。活動中には「思考をまとめる形式の提示」「説明の評価基準の意識化」「協働的学習環境の設定」があった。事前事後の作文から内容面・文章構造面の向上が示された。学習者コメントから、日本語力・発信力・思考力が高まった実感と協働作業による学習方法への気づきがあったことが示された。

研究成果の概要(英文): "Explaining to others" is a way to increase monitoring in reading comprehension. This study aims to examine deeper comprehension and consciousness of the Japanese language learners' monitoring skills by collaborating and building their explanation process with other learners. We conducted classroom activities to 1) read an essay in groups and create a poster, and 2) prepare explanation materials in pairs as shared reading of a book and report the content of the text to classmates who have not read it. Scaffoldings by teachers include showing how to organize ideas, establishing evaluation criteria for explanation and preparing collaborative learning environment. Improvements examined by learners' writing essays were observed in content and sentence structure. Learners' feedbacks showed that they realized enhancement of comprehension, communicativity and thinking ability in Japanese. Learners also realized various learning styles and ideas from collaborative learning.

研究分野：日本語教育

キーワード：読解 メタ認知 モニタリング 他者への説明

1. 研究開始当初の背景

これまでに大学で学ぶ留学生に適した読解学習法の一つとして「読んだ内容を他者に説明する」方法について検討してきた。

説明する力は、コミュニケーションやプレゼンテーション場面、書くなどの産出系（話す書く）の能力として考えられることが多い。しかし、本研究では、他者に説明するためには読んだ内容を再構築しなければならず、そのために自分の理解度をより意識的に評価する必要がある点に着目した。また、他者に分かるように説明するためには、説明する相手の理解状況についても適切に評価する必要がある。つまり、他者に説明する課題は、読解プロセスにおいて、読み手自身（説明者）に加えて、もう一人「聞き手（他者）」を登場させる方法である。「説明するために文章から要点を取り出し、他者に分かりやすく再構成するプロセス」が、読み手（説明者）の文章理解の深化と得た情報の内化をもたらすと考えている。

加えて、言語学習の方法として、学習者どうしが互いに働きかけあいながら協力して学ぶ協働学習（collaborative learning）という学習方法が注目され、関心が高まっている。Bruer（1993）は学びの方法として、学習や問題解決について対話できるようなグループ学習を設定することを提案している。学習に複数の視点を取り入れることによって、学習プロセスの内省や意識化につながるためである。本研究においても、説明を考えるために学習者どうしで試行錯誤する協働的な学習プロセスが読解プロセスのモニタリングを促し、モニタリングの技能を意識化させる機会になると予想している。

佐藤（2015）の説明活動を取り入れた読解活動において、学習者間の説明活動のみでは学習者によって文章理解度の向上の度合いが異なったが、説明活動に文章構造を意識化する教師のフィードバックを組み合わせることで、より多くの学習者において理解度が向上することが示されている。単に文章を読んでその内容を説明させるだけではなく、説明を構築するプロセスを充実させること、言語・認知面の教師のスキヤフオールディング（足場かけ、支援）を適切に行うことが重要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、モニタリングの働きを促すための学習法として、「他者への説明」が核となる読解活動を提案することを目的とする。そのために、説明活動の方法を検討するとともに、言語的側面と認知的側面の学習を支援するスキヤフオールディングについても検討する。調査の成果をもとに、説明活動を取り入れた読解学習プログラムを提案したい。

3. 研究の方法

説明構築プロセスを他の学習者と協働で行うことにより、内容理解の深化とモニタリング技能の意識化を目指す読解学習プログラムを開発する。

読解学習プログラムでは次の3種類の説明構築活動を組み込んだ14回の授業を計画した。

- ・ 作文の内容をグループでポスター化する活動とポスター発表
- ・ 1冊の本の分担読解においてペアで文章をレジюме形式にまとめる活動と他の学習者への説明
- ・ グループごとに1冊の本を選び口頭発表資料を作る活動と口頭発表

読解学習プログラムの方法と成果については、①説明構築活動におけるスキヤフオールディングを取り挙げてその方法を検討するとともに、②プログラム前後の作文分析により学習成果を検証する。

4. 研究成果

4-1 モニタリングを促進するためのスキヤフオールディングの検討

(1) 評価の観点の意識化

ーピア評価とグループでのふり返りー

よい説明の観点を意識化する方法として、学習者が説明の評価項目を作成した。作成した評価基準を用いてグループ発表をピア評価した後ふり返りを行った。

発表直後の個別コメントでは、自分の発表について準備不足や時間超過への反省、発表の流れや構成へのネガティブなコメント、日本語表現の不足や間違いへの反省など、反省点への記述がほとんどであり内容は具体的ではなかった。

その後、相互評価得点をグラフ化して提示してグループで発表のふり返りを行ったところ、相互評価点が低い項目へのふり返りが多くみられ、問題点がより意識化されたことが示された。また、直後のコメントと比べて、事例をともなった具体的な内容が記述され、不足した点だけでなく、良かった点や発表時に留意した点についての記述もみられた。個人での内省では否定的な感情に傾いていたところを、内省プロセスを共有することで、結果に満足する部分を見つけ肯定的な感情をもつこと、結果を自分の能力ではなくより具体的な方法に帰属させることが観察された。

また、教師からのフィードバック（書面）の影響についても検討したところ、発表の構成面についてはコメントが少なく、意識化しにくい項目であることがわかった。評価項目と対応させながらフィードバックを提示するなど、学習者に伝わりやすくする工夫が必要である。

(2) 分担読解での言語スキルの支援

—協働的なレジュメ作成プロセス—

分担読解では、課題本1冊を学習者が分担して読んで発表資料(レジュメ)を作成し、授業中に他の学習者に内容を説明する。レジュメ作成には、伝えるべき項目を抽出し、それを形式に合わせて再構成することが必要となるが、文庫本で10ページを超える分量の読み物を2ページ程度にまとめることは困難な作業である。レジュメを作成した経験がある学習者はいなかったため、授業で作成練習を行った。授業では、①教師がレジュメの形式と構成を説明し実例を示した後、②実際にペアでレジュメを作成し、③作成後、他のペアとレジュメを見せ合い、内容や形式を比較し合った。④その後読んだ箇所が異なるペアを組み合わせて、内容を説明する練習をした。⑤授業の終わりには、クラス全体で各レジュメのよいところを指摘させた。

学習者が作成したレジュメを見ると、箇条書きの羅列になっていて内容の分類やナンバリングがないもの、重要度の高い内容よりもおもしろいと思ったところを中心にまとめたもの、出来事を発生順に並べただけのものなど、形式面(階層化)・構成面(因果関係や上位下位概念)・内容面で改善が必要であった。実践では、他のペア作成のレジュメを見ることで、改善点に気づいたようであった。その後の分担読解で提出されたレジュメでは形式や内容はおおむね整っていた。

4-2 協働的な説明構築活動を取り入れた読解学習プログラムの効果

(1) 学習効果の検討

学習者のライティングを評価することにより、プログラムの有効性の検討を行った。コース開始時と終了時に同一テーマで書いた作文を分析対象とし、「読み手」「内容」「構成・結束性」「日本語」に分けて評価した。

作文の時期(2:コース開始時・終了時)と評価項目(4:「読み手」「内容」「構成・結束性」「日本語」)の被験者内2要因分散分析を行った結果、作文の時期の主効果および交互作用が有意であり、4つの評価項目すべてにおいて、コース開始時よりも終了時が有意に高かった。つまり、「読み手」「内容」「構成・結束性」「日本語」のどの評価項目においても、終了時のライティングが高く評価された。また、終了時のライティングにおいてのみ、評価項目間に有意な差がみられ、「内容」が「日本語」より高く評価された。「内容」の評価が上がったことから、内容理解の深まりが示されたと考えられる。またコース開始時の作文に対して特にフィードバックは行っていなかったにも関わらず、終了時の作文において「読み手」「構成・結束性」「日本語」を含め総合的に向上していた。これは、ペアやグループで説明を構築するプロセス

により、言語面や思考面も高まったためであると考えられる。しかしながら、「読み手」「内容」「構成・結束性」と比較すると「日本語」の平均評価得点の伸び率はやや緩やかである。今後日本語面の正確さや適切性を強化するようなスキュフォーリングや活動への更なる工夫が求められる。

(2) 学習者のふり返り

プログラム終了時のふり返りのコメントでは、「自分の弱点から見直して、何が問題なのか、どうすれば改善出来るかをみんなとの話し合いから分かることができた。」などの気づきがみられた。他にも、日本語力・発信力・思考力が高まったと実感したこと、他の学習者との話し合いから自分の問題点に気づいたこと、学習方法や改善方法に気づいたことなどが示された。

4-3 まとめと今後の課題

本研究では、読解学習と他者への説明とを結びつけ、説明を構築するプロセスを協働的に行う読解学習プログラムを開発しその効果を検討した。

協働学習は、学習者がともに一つの課題を実行するために、協調的に努力をすることである。協働的学習において学習者たちは共有した目標に向けて行動し、共有した理解を構築する。より深く文章を理解する方法として、説明活動を取り入れた読解プログラムの有効性を示唆することができた。

ただし、今回は一連の授業活動のどのような要素がどのような影響を与えたかについては特定することができなかった。また、読解以外の運用能力や学習スキルの向上、参加者の内容への理解度やその後の行動の変容などについても客観的指標を用いた検証が必要である。

引用文献

Bruer, J.T. (1993). *Schools for thought: A science of teaching in the classroom*, Cambridge, MA: MIT Press.

佐藤礼子 (2015). 「日本語学習者のグループ発表における評価の観点の意識化に関する検討」『日本語教育方法研究会誌』22(1), 56-57.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

① 佐藤礼子・奥野由紀子 (2017). 「ライティング評価による内容言語統合型学習(CLIL)の有効性の検討—「PEACE」プログラムの実践を通して—」『第二言語としての日本語の習得研究』20, 80-97. 査読有

<https://ci.nii.ac.jp/naid/40021429865/>

- ② 佐藤礼子 (2015). 「日本語学習者のグループ発表における評価の観点の意識化に関する検討」『日本語教育方法研究会誌』22(1), 56-57. 査読無
DOI: 10.19022/jlem.22.1_56

[学会発表] (計 3 件)

- ① 佐藤礼子, 第二言語学習における自己調整学習を促すー日本語学習者の学びのプロセスに焦点をあててー, 第 28 回 第二言語習得研究会 (JASLA) 全国大会 (招待講演), 2017 年 12 月 16 日, お茶の水女子大学.
- ② 奥野由紀子・佐藤礼子, ライティング評価による内容言語統合型学習 (CLIL) の有効性の検討, International conference of Japanese language education 2016 (口頭発表), 2016 年 9 月 10 日, Indonesia, Bali.
- ③ 奥野由紀子・小林明子・佐藤礼子・渡部倫子, 学習過程を重視した CLIL (Content and Language Integrated Learning) の試みー日本語教育と大学初年次教育における同一素材を用いた実践ー, 2015 年日本語教育学会秋季大会, (パネルディスカッション), 2015 年 10 月 10 日, 沖縄国際大学.

[図書] (計 1 件)

- ① 奥野由紀子 (編著), 小林明子, 佐藤礼子, 元田静, 渡部倫子 (著) 『〈CLIL 日本語教育シリーズ〉日本語教師のための CLIL (内容言語統合型学習) 入門』, 凡人社, 2018.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 礼子 (SATO Reiko)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・准教授

研究者番号 : 30432298